前に進もう

副読本
50ページ

年　　組　　番　氏名

1 今日の学習で思ったことや考えたことを書きましょう。

前に進もう

あの日，地面の奥底から聞こえる大地を揺らす音が東日本中に鳴り響きました。

次の日，私は自分の家を見に行きました。すると，そこにはおびただしい数のガレキしかなく，私の家はありませんでした。私は帰る場所を失いました。

その日から，気仙沼小学校での避難所生活が始まりました。何をする気にも，何も考える気にもなれず，ただ漫然と毎日が過ぎていきました。そんなある日，同じように気仙沼小学校に避難していた，昔から知り合いの女の子から「新聞を書かない？」と誘われました。私は暇つぶしにでもなればと思い，一緒に書くことにしました。そして，1枚の新聞が完成しました。その新聞の女の子は，『皆さま，いろいろなご不便があると思いますが頑張りましょう。私たちも頑張ります』と書いていました。私は，はっとさせられました。私は，その女の子に，「何で新聞を書くの？」と聞いてみました。すると，「この震災で大人の人たちは皆暗い顔をしているから，私たちの新聞を読んでちょっとでも元気になってもらえればと思って。」こう言っていました。

私より年下の小学校1年生の女の子が，私たち子どもの力で周りの人たちに対してできる精一杯のことを考えていたのです。私は，自分が恥ずかしくなりました。この女の子は今の状況にしっかりと向き合い，周りの大人たちを笑顔にしようとまで考えていたのです。私は，何をする気にもなれず，何も考えることもしないまま，現実から逃げていたのです。

この時から私は，この状況と向き合い，少しでも前へ進もうと決意しました。

女の子が考えた新聞は『ファイト新聞』と名づけられました。ファイト新聞は4人のメンバーから始まりました。そこから人数はどんどん増え，最終的には12人まで増えました。新聞には，避難所の皆さんに元気になってもらえるようにと，炊き出しの内容やボランティアの皆さんのこと，イベントなどの身近なことを取り上げ，書いていました。私も自分にできることとして，一生懸命記事を書きました。そんなある日，同じ避難所にいた女性のお年寄りの方が私に，「いつも新聞を読ませてもらってるよ。とても元気をもらっている。ありがとう。」と言ってくれました。私は，嬉しさが体中からこみあげてきました。もしあの時，この震災と向き合うことからずっと逃げていたら，今こんな気持ちを味わうことはできなかったんだ。どんな時でも現実と向き合い，前へ進むことが大切なんだと気付きました。このことに気付かせてくれたファイト新聞に，私は感謝しています。今も3か月に一度のペースで活動を続けています。

私の住んでいる街は，まだ復興したと言える状況ではありません。将来を担う私たちの世代がしっかり現実と向き合い，将来を考えていくことが大事なのだと思います。

私は今，中学3年生で，自分の進路を自分で決めるときがきました。私は将来，保育士になりたいと思っています。今は，自分の進路としっかり向き合い，自分のできることを精一杯やって，夢に一歩でも近づきたいと思っています。

（2014年3月　宮城県気仙沼市立学校長会・気仙沼市教育委員会・宮城教育大学発行　『被災から前進するために　第3集』より）

復興に歩みを進める気仙沼市